「ポチ」と呼ばれていた男性（５９）に会った。様々な人権侵害 が明るみに出た大阪府箕面市の精神病院「箕面ヶ丘病院」に入院 していた患者だ。大勢が出入りするデイルームの一角に、ひもで つながれたまま寝起きし、用を足すのもポータブル便器。そんな 違法拘束を１０年近く受け、昨年８月に府の抜き打ち調査で問題 が発覚、ようやく転院した。同病院は患者全員の転退院が終わり、 １日、保険医療機関の指定取り消し処分を受けたが、奪われた歳 月と人間の尊厳には何の償いもない。（科学部　原昌平）

◆半径２メートルの生活

窓の鉄さくから腰に延びた二メートルほどの白い布ひも。その届く範囲が男性の動ける空間のすべてだった。リノリウムの床に畳一 枚と布団が敷かれ、食事は便器のふたの上で食べた。ひもが外され るのは、たまの入浴と行政の立ち入り調査の時ぐらい。それでも温 和な男性に、他の患者は「ポチ、元気か」と冗談半分で声をかけた。

入院は二十数年前。精神分裂病との診断だった。法的には退院も 外出も自由な任意入院なのに、「乾電池や鉛筆など目についた物を口 に入れる」という理由でつながれていた。両腕が動かせない拘束衣 を着せられた時期もあったという。

拘束には、精神保健指定医の診察とカルテ記載が法律上欠かせな いが、何の記録も残っていない。だから違法拘束の期間も正確には つかめないが、関係者によると、１０年前に異物を飲んで開腹手術 を受けたあとは続いていたという。

＜2002 年 2 月 4 日大阪読売新聞夕刊＞